大学正課体育実技の教育効果に関する研究

(5) 体育実技授業に対する態度

岡野 崇彦* 平田 久雄* 小山 秀哉*
戸苅 晴彦* 渡辺 慶寿*

Studies on the Educational Effects of Required Physical Activity Courses at the University of Tokyo

Students' Attitudes Toward Required Physical Activity Courses

by

TAKAHIKO OKANO, HISAO HIRATA, SHUYA OYAMA, HARUHIKO TOGARI and YOSHIHISA WATANABE

(Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

Students' attitudes toward the required physical activity courses were surveyed at the University of Tokyo in order to get information for the administration of the courses and to examine factors which affect students' attitudes. A questionnaire method was used in this study. The first questionnaire (A) was administered to 210 male freshmen students right after they first enrolled in their physical activity courses in April, 1966, and the second one (B) was given to the same group of students a year after the first one. Data were processed by the Rickert Method. Following conclusions were drawn from the discussion of the results.

1. As a whole, students favorable attitudes toward the required physical activity courses.
2. No significant differences in attitudes were found between the liberal art majors and the science majors.
3. Students who had belonged to athletic squads in their high school years and/or who were then belonging to athletic squads showed more favorable attitude than students who had not belonged to and/or who were not belonging to at the time of the survey.
4. No significant changes in the students' attitudes were recognized after one year of learning in required physical activity courses.
5. As was revealed that students with higher physical fitness level showed more faborable attitudes than those who were physically less fit, it might be concluded that the level of student's physical fitness was a factor which affects students' attitudes toward required physical activity courses. [Proceedings of Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo, No. 6, 27～32, 1971]

* 東京大学教養学部体育研究室

緒　　言

態度は行動を規定する主体的な条件であり，多くの学習活動の基礎である．

本学において体育実技授業を受講している学生が，体育実技授業に対してどのような態度をもっているかについて調査し，体育実技授業実施上の参考にするとともに，体育実技授業に対する態度に影響をおよぼす要因について検討することを目的として，本研究を行った．

体育実技授業に対する態度の測定は，最近では米国の Wear, C. L. の研究がその発端となった[6]．Wear によって作成された体育実技授業に対する態度尺度は，一般化され，数多くの研究者に用いられた[1),2),3)]．それらの結果はすべて，学生が体育実技授業に対して好意的な態度をもっていることを示した．

日本では，徳永らが上述の尺度を用いて研究した結果，態度を決定する要因として，専攻学部，性，大学時のサークル所属，選択した実技種目に対する関心等があることを示した[5]．

研　究　方　法

1.　調査表

1)　調査表（A）

態度を表現した意見項目は，Wear の Physical Education Attitude Inventory を参考として第1表に示したような24項目を作成した．各項目に

第1表　調査表（A）および反応カテゴリーへの配点

	意　　見	反応カテゴリー				
		大いに賛成	賛成	どちらともいえない	反対	大いに反対
	体育実技授業は（以下略す）					
1	授業時間の中からはづす科目があったならばその一つである．	0	6	12	21	32
2	情緒のコントロールを学ぶことのできない機会である．	0	8	22	27	37
③	有害な情緒的緊張から解放させるものである．	38	25	14	7	0
4	選択にするべきである．	0	12	24	27	41
5	充実した生活を送るために必ずしも必要ではない．	0	10	19	25	37
6	身体に利益をもたらすよりも害になることの方が多い．	0	0	10	23	37
7	他の人と一緒にやることは楽しいことである．	34	26	11	0	0
8	良い社会人としての態度の形成のために役立つものである．	39	27	17	8	0
⑨	友人を作るのに適さない時間である．	0	0	34	41	42
10	時間の浪費だという評価はまちがいである．	33	21	11	6	0
11	生活を豊かにすることに大いに貢献するものである．	33	21	11	0	0
12	一日一時間体育の授業があれば身体的に有益である．	32	24	10	0	0
13	生活のために必要な体力を増進させるのに役立つ．	35	22	9	0	0
⑭	互いに競いあうので社会性をうばうものである．	0	0	22	23	37
15	健全な人生観をつくるものである．	43	32	22	10	0
16	身体の緊張を除去したり軽減したりするのに役立つ．	35	21	10	0	0
⑰	健康な情緒を養うことを助けるものである．	37	21	20	0	0
18	大学の科目の中で比較的重要なものの一つである．	38	26	21	9	0
19	身体的な利益だけに限られるものである．	0	0	10	21	34
20	大学の専門課程にもあるべきである．	31	21	14	7	0
21	体育の授業で学習した技術は個人の生活には役立たない．	0	0	14	20	34
22	望ましい性格特性を発達させるものである．	46	33	20	9	0
23	現代教育の中で主要な位置をしめないものである．	0	9	17	26	38
24	体育をすることによって楽し生活を送ることができる．	34	17	10	0	0

○ 印は，削除される項目

は，大いに賛成，賛成，どちらともいえない，反対，大いに反対の5反応カテゴリーを用意した．

2)　調査表（B）

調査表（A）を参考にして第6表に示したような25項目からなる調査表(B)を作成した．反応カテゴリーは調査表(A)と同様である．

2.　対象及び時期

1)　調査表（A）を用いて，昭和42年4月入学1年生男子を対象に同年5月上旬に第1回の調査を実施した．

第2回は，昭和43年5月上旬，第1回目を行った者(2 年生)について再調査を行った．記入もれ等不完全な資料を除いて200名について集計した．

2)　調査表(B)を用いて，昭和43年4月入学1年生男子359名を対象に同年5月上旬に実施した．

結果と考察

1.　調査表（A）による結果

第1回目の調査実施時期は，体育実技授業の開始後間もなくであり，入学後の授業による体育実技授業に対する態度への影響はほとんどないと考えられ，以後の体育実技授業に対する態度の変化をみるための基準となりうるものと考えた．

回収した調査表の採点には，各項目に対する被調査者の反応に何点与えるかということを，調査後その調査資料にもとづいて決定する，シグマー値法を使用した．各意見項目の反応カテゴリーに配点された得点は，第1表のとおりである．またシグマー値法にもとづく一連の手続きを経て24項目から4項目が削除された．残りの20項目について採点を行い，その結果を得点とした．各反応カテゴリーに対する得点配分は0点から43点であった．

態度得点は，仮に意見項目全部に最も好意的に答えた場合723点，どちらともいえないに答えた場合272点，最も非好意的に答えた場合0点となる．

1)　1年次と2年次との比較　第2表．

全体的にみると1年次 438.9，2年次 455.0 と有意ではないが得点の増加を示した．

2)　文科・理科別の比較　第3表．

1年次，2年次とも理科がよい得点を示したが，有意な差ではなかった．

1年次から2年次の変化は，文科，理科とも得点の増加を示したが有意ではなかった．

3)　運動部活動

高校における運動部経験有無別の比較　第4表．

1年次，2年次とも，経験者の得点が優れていた．いずれも有意差（5% 水準）が認められた．1年次から2年次の変化は，経験，非経験とも得点の増加を示したが，有意な差ではなかった．

大学における運動部所属・非所属別の比較　第5表．

1年次，2年次とも，所属者の得点が優れていた．1年次においては有意差(5% 水準)が認めら

第2表　全体の結果

	N	M	S.D.
1 年	200	438.9	105.7
2 年	200	455.0	108.1

第3表　文科・理科別の得点

	1 年生			2 年生		
	N	M	S.D.	N	M	S.D.
文 科	112	437.0	104.5	112	447.2	100.7
理 科	88	445.3	93.1	88	462.1	106.4

第4表　高等学校運動部経験・非経験別の得点

	1 年			2年		
	N	M	S.D.	N	M	S.D.
経 験	78	460.8*	97.6	78	476.7*	111.0
非経験	122	424.9	108.4	122	441.1	104.3

*: 5%

第5表　大学運動部所属・非所属別の得点

	1 年			2 年		
	N	M	S.D.	N	M	S.D.
所 属	55	474.2*	105.2	55	472.7	110.0
非所属	145	425.5	102.7	145	448.2	106.9

*: 5%

第6表　調査表（B）および反応カテゴリーへの配点

	意　　見	反応カテゴリー				
		大いに賛成	賛成	どちらともいえない	反対	大いに反対
	体育実技の授業は（以下略す）					
1	選択科目であるべきである.	0	7	16	20	31
2	週一回では少ない.	34	24	17	10	0
③	運動部に入っている者にとっては必要のないものである.	0	8	16	26	36
④	仲間や友人を作るのによい機会である.	39	28	17	8	0
5	時間の浪費である.	0	5	11	21	34
6	身体を鍛えるために必要である.	37	24	13	6	0
⑦	疲労が後日にのこり学業に支障をきたす.	0	7	17	27	38
8	3，4年にももうけるべきである.	32	21	14	9	0
9	レクリェーションとしてのみ意味があるものである.	0	8	15	24	38
10	正課としては不必要である.	0	7	14	23	35
11	気分を爽快にするものである.	36	23	11	0	0
12	健康の維持増進を助ける重要な科目である.	34	21	9	0	0
13	人を粗暴にするものである.	0	6	14	23	35
14	性質を朗らかにするものである.	39	27	16	6	0
15	思索力を麻痺させる.	0	7	14	24	36
16	自然な運動というよりも不自然な運動を強いることが多い.	0	9	18	29	41
17	人を単純にする.	0	8	15	24	35
18	意志を強固にするものである.	39	26	16	8	0
19	日常生活との結びつきはうすいものである.	0	9	16	27	40
20	勝負にはしり品性を下劣にする.	0	7	16	26	38
21	たんに運動不足を解消させるだけのものである.	0	9	18	28	41
22	人間性を豊かにする.	42	31	20	9	0
23	学力を低下させる.	0	0	11	22	34
㉔	体育の意義を認めないものは健全ではない.	35	25	16	8	0
㉕	思想善導の手段としてよいものである.	34	26	17	8	0

○ 印は，削除される意見

れたが，2年次においては，有意差が認められなかった．1年次から2年次の変化は，所属，非所属とも増加を示したが有意な差は認められなかった．

以上の結果から全体的には，体育実技授業に対して好意的な態度をもっていることを示した．

1年間の変化については，全体的にみた場合，得点は増加の傾向を示し，この得点の増加からみて体育実技授業の目的は一応達成されていると考えられる．

文科・理科別については，理科がよい得点の傾向を示したが，有意なものではなく，文科と理科との間に特定の傾向はないことが認められた．

高等学校における運動部活動の経験は，経験者と非経験者間には，1年次，2年次とも有意な差が認められ，経験者は非経験者に比べて体育実技授業に対してより好意的な態度を持っていることを示した．

大学における運動部活動は，運動部所属者が非所属者よりもよく，1年次においては有意差を認めたが，2年次においては認められなかった．これらの得点の変化から，運動部活動に関しては，大学よりも高等学校における経験が，態度に大きな影響をおよぼす要因であると考えられた．

2.　調査表（B）による結果

調査表（A）を一部改訂して調査表（B）を作

成した．

調査の時期は入学後間もなくであり，授業による態度への影響はないものと考えた．

調査表の採点は，調査表（A）と同様にシグマー値法を使用した．各意見項目の反応カテゴリーに配点された得点は第6表のとおりである．シグマー値法による一連の手続きを経て25の意見項目から5項目が削除され，残りの20項目について採点を行い，その結果を態度得点とした．各反応カテゴリーに対する得点配分は0点から42点であった．態度得点は，仮に意見項目全部に最も好意的に答えた場合731点，どちらともいえないに答えた場合294点，最も非好意的に答えた場合0点となる．

1年間の変化，文科・理科の別，運動部活動への参加の有無などについては，調査表（A）により結果を得たので，ここでは運動能力別による体育実技授業に対する態度について検討した．第7表は，全体および運動能力別の得点をあらわしたものである．

第7表　全体および運動能力別の結果

	N	M	S.D.
全　体	359	454.1	97.7
トレーニング・グループ	210	472.1**	99.3
スポーツ・グループ	149	428.7	89.7

**：1%

運動能力は，学年始めに行った次の4種目の運動能力テスト　1）垂直跳び　2）反復横とび　3）腕立伏臥腕屈伸　4）踏台昇降テストの得点によって判定し，次の2群にわけた．

I）トレーニング・グループ；運動能力テストの得点がある基準以下の者で構成し，運動能力低位者群として授業時間においてサーキットおよびウェイトトレーニングを行う．

II）スポーツ・グループ；得点がその基準以上の者で，スポーツ種目を選択し行う．

1）全体的には高い得点を示し，体育実技授業に対して好意的な態度を持っていることが認められた．

2）トレーニング・グループとスポーツ・グループとの比較は，スポーツ・グループの得点が優れており有意差（1% 水準）が認められた．

体力の優れているスポーツグループの方が体力低位のトレーニング・グループより体育実技授業に対してより好意的な態度を持っていることを示した．

Broer も体力低位グループの学生の態度が一般の学生より非好意的であった結果を示したが[1]，態度に影響をおよぼす要因として「体力」が考えられることは，体育実技授業実施上考慮すべき点であり，さらに今後の変化について追跡する必要が考えられる．

要　約

体育実技授業に対する態度について，リッカート法による調査表(A)・(B)を用いて調査し，指導上の一助とするとともに，態度に影響をおよぼす要因について検討した結果，次の結論をえた．

1）全体的にみて，学生は体育実技授業に対して好意的な態度を示した．

2）文科・理科による異った傾向は認められなかった．

3）運動部活動に関しては，高等学校における運動部経験者と大学において運動部に所属するものとは，非経験者，非所属のものより好意的な態度を示したが，態度に影響をおよぼす要因としては高等学校における運動部経験の方が大きいと考えられた．

4）1年間の態度変化には特定の傾向は認められなかった．

5）トレーニング・グループとスポーツ・グループとではスポーツ・グループの方がより好意的な態度得点を示し，体力が態度に影響をおよぼす1要因であることが認められた．

参考文献

1) Broer, M. R.: Evaluation of a basic skills curriculum for women students of low motor ability at the University of Washington. Res. Quart., 26, 15～27, 1955.

2) Brumbach, W. B. & Cross, J. A.: Attitude toward physical education of male students entering the University of Oregon. Res.

Quart., 36, 10～16, 1965.
3) Campbell, P. E.: Students attitudes toward physical education. Res. Quart., 39, 456～462, 1968.
4) Keogh, J.: Analysis of general attitudes toward physical education. Res. Quart., 33, 239～244, 1962.
5) 村田宏雄他著: 社会調査の技術. 誠信書房, 154～173, 1965.
6) 徳永幹雄: 九州大学学生の体育実技に対する態度測定. 体育学研究, 10～1, 228, 1965.
7) Wear, C. L.: The evaluation of attitude toward physical education as an activity course. Res. Quart., 22, 114～126, 1951.
8) Wear, C. L.: Construction of equivalent form of an attitude scale. Res. Quart., 26, 113～119, 1955.